

番号	5 - 30	申請者	看護師 榎元 果奈
<p>【審査申請課題】</p> <p>A病棟における神経筋難病病棟経験3年未満看護師の患者との関わりにおける思いから見えてきたこと</p>			
<p>【審査課題の概要】</p> <p>神経筋難病は難治性・進行性の疾患であり、看護師の身体的・精神的負担は大きい。また、神経筋難病患者とのコミュニケーションは特徴的であり、特に非言語的コミュニケーションには、さまざまな手段があるが、時間を要し、複数の患者を対応している看護師にとっては容易ではない。さらに、患者の個別性もあり看護師はすべての患者のニーズに沿ったケアを提供できていないのではという葛藤もある。</p> <p>実際にA病棟では神経筋難病病棟経験が少ない看護師が、患者との関わりの難しさに負担を感じ、配置転換を希望したり、退職している。A病棟のスタッフの声として、「訴えられる患者のケアに時間を多く取られ、訴えられない患者へのケアが少なくなることへの葛藤がある。」「こだわりが強く細かい欲求が多い患者をケアすることに負担を感じる。」「患者から心ない言葉をぶつけられる。」などが聞かれ、配置転換や離職の要因にもなっているのではないかと思われる。</p> <p>安東ら(2009)は、神経筋難病病棟経験3年未満(新人看護師を除く)は、「関わりの難しさ」を感じ、離職、配置転換意思に直接的に影響していたとされており、神経筋難病看護経験が3年未満の場合は、サポートが弱いと離職・配置転換意思とともに強まることも示されている¹⁾と述べている。その一方で、千葉ら(2019)の文献では、筋ジストロフィー病棟に勤務する看護師の「仕事のやりがい」は職務満足度の構成要素となっており、やりがいを感じている者ほど職務満足度が高く、看護師が質の高い看護を提供するためには、看護師への満足度を高める必要があることを明らかにしている²⁾とされている。A病棟でも患者との長い時間の関わりの中で少しの変化に気付くことができることや、コミュニケーションがうまくいったときなどにやりがいを感じるといった経験ができる。しかし、自ら難病看護師を目指そうとしている看護師が少なく、今後の育成に繋がっていない現状がある。</p> <p>このように難病看護における看護のやりがいを感じることで質の高い看護に繋がっていくという示唆がある一方で、困難さから離職・配置転換意思に繋がり、人材の育成にまでいたっていない現状がある。さらに、神経筋難病病棟の経験が少ない看護師ほど、今までの経験値では対応できず、看護のやりがいを感じないまま挫折してしまう可能性がある。</p> <p>以上より、神経筋難病病棟における経験年数3年未満の看護師への支援は、必要不可欠であると言える。よって、神経筋難病病棟経験3年未満看護師に焦点をあて、A病棟における神経筋難病患者の看護に対する思いを明らかにすることで、病棟での支援の在り方の示唆を得たいと考えた。</p>			
審査結果	承認 (令和6年3月14日)		